

平曲研究会の記

平曲を見たのは——聞いたと申すべきですか——、私として今度が最初でした。生まれて以来最初の経験という意味で、私のみならず他の多くの来会者もひどく感激していました。

琵琶法師は館山甲午氏、——法師と申し上げては甚だ御無礼。実は館山先生は黒い背広のジョーシヤたる中年の好紳士、蝶ネクタイの似合うような方。氏は「平家音楽史」の著者館山漸之進氏の令息で、仙台の高校で音楽の教師をされている方です。

能三日とか申して、よい能を観た後は、三日間は陶酔の境からぬけられないというのですが、今度の平曲会のアとの、二、三週間、会う人のだれかれなしに平曲の感懐と、新習得の知識を吹聴したものでした。会合の日は、本年四月三、四日の両日。主催は東洋音楽会、東大國語国文学会、それに國語学会が加わっていました。

平曲を解説したものに、平曲は地上から完全に滅んだなどと書いてあったりします。が、仙台に今度の館山甲午氏が、名古屋に井野川・土居・三品の三検校がおられます。

平曲の会の第一日(四月三日)は、日本工業クラブの三階。(東京駅表口新丸ビル隣の隣)。まず久松潜一博士の御挨拶。詳細なプリントを用意して金田一春彦氏の音楽として見た平曲の全体的な解説。また渥美かをる様の「平曲の沿革と語り本の系譜」と題する研究解説がありました。細々としたかよい声の渥美様の話は、現存する平曲がすべて前田流であると力強く断案した

もの、諸本の解説も優れたものでした。なお「平曲と声明」と題して横道万里雄氏が、「平曲と近世邦楽との関係」と題して町田嘉章氏が、それから明治の名匠湯浅半月検校の「弓月流し」、佐藤正和検校の「与市」、深川照阿検校の「六代乞請」といった故人のレコードが披露されました。田辺尙雄氏の解説によれば、湯浅検校のものは、珍しい波多野流のもので、傾聴の価値ありとのこと。とにかく、いずれの解説者も聴取者の知識の浅度皆目予備知識のないことを常に忘れず、実にかゆい所に手のとどいた話しぶり、また講師相互に連絡が緊密に取れ平曲を立体的に解き明かして要領のよい水ぎわだった進行でした。解説の途中で、二、三回館山氏の実演がありました。第

二日は四月四日。代々木の原宿で。まず館山氏が少年のころより亡父漸之進氏のものにあつて、平曲を習った有様、亡父の追憶談、漸之進氏が、熱狂的な意気込みで平曲の伝承保存に尽力したこと。当時の平家会と称するものの実態——夕食後二十人ほどの同好が集まって平曲の稽古会を開いたことなど——を話され、また「木曾最後」「月見」などを演奏があり、ついで金田一春彦氏の平家音楽の講話、その間に「与市」の曲を来会者が幾回も〜教えられて実地に習い覚え、最後に特に秘曲「一原御幸」「祇園精会」などの演奏があり、会合者の自己紹介と館山氏に対する感謝の挨拶があつて、有意義な会を閉じました。最後に一筆。東洋音楽会の岸辺成雄氏に御礼。同氏は二日間にわたつて、会長の椅子に坐つておられました。三井重工の重役といつた感じの同氏が黙つて坐つておられたので、各講師より活躍でき来会者も大きな信頼感を受けました。なお両日にわたつて、岩淵悦太郎、大野督、吉川英士、岸辺成雄等諸氏秘蔵の平家正節本などが展覧されて、甚だ有意義でした。

(中田祝夫)